えぬぴおん 第 9 号
2004 年 2 月 25 日

特集
ボランティアスピリッツで生きる！

「ボランティアしています…」

私たちは気軽にこの言葉を使う。
ボランティアって何だろう。
自由意志のもとで自発的に社会に向けて奉仕をすること？

現代は人と人のコミュニティが薄れています。
自分だけではなく、誰かのための思いやりの気持ちをもっていますか？
自分を尽くすことは、損なのでしょうか？
暇と時間さえあればできることなのでしょうか？
モノ・カネではない価値観を見直しましょう。
多くの市民活動の現場で、「無償」で関わっています。
ボランティアメンバーの働きは不可欠でその存在は大きい。

あなたはなぜ、ボランティアをするのでしょうか？
一人一人の「ボランティアのコ・コ・ロ」にせまってみました。

ボランティア概論

# 魅力的なボランティアの生き方

北海道大学　高等教育機能開発総合センター教授　木村　純

【木村　純】
北海道大学教授（教育学博士）同高等教育機能開発総合センター　生涯学習計画研究部。地域の人々の生涯学習にどのような役割を担えるかを研究。専門は、生涯学習学、地域福祉学で 20 代から 60 代までの社会人大学院生と共に学ぶ。道民カレッジ評価・活用部会座長、さっぽろ市民カレッジ運営委員会委員長などをつとめる。

「ボランティアは暇と時間があるからするのではないんですよ」。そうきっぱり語る木村純さん。札幌ボランティア研究会で、多くのボランティアに関わる人たちと共に学び合う中、ボランティアする人たちの共通の悩みや問題をとりあげ、ボランティアの本質を見つめてきた。さて、魅力的なボランティアとは何か？そしてその生き方とは…みなさん一緒に考えてみましょう。

## さっぽろ市民カレッジと札幌ボランティアコーディネーター研究会

私が、共に学ぶ「札幌ボランティアコーディネーター研究会」（第 3 木曜日に私の研究室で例会を開催、以下研究会）のメンバーの多くは、「ちえりあ」（札幌市生涯学習総合センター）の「さっぽろ市民カレッジ」の「ボランティアコーディネーター・リーダー養成講座」で学んだ方たちである。「さっぽろ市民カレッジ」は、これからの札幌のまちづくりを市民と行政が協働して進めていくのにふさわしい運営のあり方を目指し、運営委員に NPO の方たちの参加を求め、講座の企画などにボランティアの方たちが参画している。

## ボランティアの相互交流を目指して

市民カレッジにおいて「ボランティアコーディネーター・リーダー養成講座」が開設された目的は、①福祉や環境保護、生涯学習、国際交流などボランティアが求められる領域に共通する問題を取り上げ、受講者の交流がそのまま領域を越えたボランティアの交流となり、講座修了後もネットワークが作られること、②ボランティアに関心を持ち、あるいは研究対象とする大学の教員への講師依頼を契機に、ボランティア活動に関わる研究者のネットワークが形成され、今後のボランティアのための継続教育に当る研究者・実践家のつながりを築くことにあった。

「研究会」は、ここで学んだ人たちが相互に交流しながら、コーディネーションやリーダーシップの力を高めるための理論・技法や優れた経験を学ぶことを目的に発足した。5年目を迎え、会員は30名ほどになり、隔月で発行する「V研ニュース」も10号を数える。学習もさることながら、ボランティア活動のリーダーたちが、グループ内部だけではなかなか解決できない悩みや課題を率直に明らかにし、耳を傾けあうことを通じてその解決方向を自ら見つけだせたことが研究会継続の理由であったと思われる。

## 魅力的なボランティアとは？

### 同じ悩みを持つ仲間を支える

ここで私たちが学んだことは、第1に、「当事者性、すなわち自分自身の悩みと向き合うことが同じ悩みをもつ仲間を支える」（東京ボランティアセンター編『シニアボランティアコーディネーターマニュアル』1993年）ということに関わっているが、魅力的なボランティアは、傍からみてけっして順風満帆の人生を送ってきた人ではないことである。パートナーに先立たれ、必死に子どもを育ててきた女性や不況の中で転機を余儀なくされた中年男性や定年退職後もずっと誇りにしてきた勤務先の企業の不祥事にショックを受けることになった高齢男性など自らのアイデンティティに関わる危機を幾度も経験し、そのような人生経験をボランティアの実践に生かしている人である。自分自身の困難に誠実に向かいあうことが援助を受ける人々からの信頼を得ることにつながることを示す。

### ジレンマや悩みを積極的に引き受ける

第2に、ボランティア活動から生じるジレンマや悩みを積極的に引き受けられる人であることである。それはまた、その悩みに耐えられるだけの喜びも体験している人ということであろう。「関りが長くなり役割と責任を自覚するのに伴って、ボランティアの困難は大きくなる」（中田豊一『ボランティア未来論』コモンズ、2000年）。私たちの研究会の目的もこうした悩みを聴きあうことにある。

### 援助を必要とする人の代弁者に

第3に、援助を必要とする人の代弁をする“勇気”である。手稲区で介護のボランティアに関わる女性は、家事援助をしている高齢者のために、「毎日同じ材料を使った食事では飽きてしまう」と冷蔵庫を見て気づいたことをホームヘルパーに伝えたり、地域の八百屋や魚屋に頼んで少量で売ってもらう。「自分のためなら出来ないけれど援助を必要とする

人のためなら出来る」ということが彼女の思いであり、こうした積み重ねが地域を変えてゆくのである。

自身に生きがいや喜びを発見し、積極的に変わることができる

　第 4 に、双方向性の自覚に関わるものである。北海道開拓の村には百数十名のボランティアがいる。野外博物館の案内にはボランティアが不可欠で、メンバーは高齢者が多くいずれも校長や新聞記者など多彩な経歴をもった方である。学習を重ね、分野によっては学芸員も及ばない知識をもっている人も少なくないが、利用者から感謝されるのは自分の知識を総動員して説明するボランティアではなく利用者の思い出話をよく聴いてくれたボランティアのほうである。ボランティア活動は「する」「してあげる」といった一方的な関係ではなく「する」こと自身に生きがいや喜びを発見する双方向性の行為であるといわれるが、ここではボランティア自身が利用者から学ぶ姿勢がまず重要であり、魅力的なボランティアは自ら積極的に変わることができる人であるということもできる。
　いずれにしても、ボランティア活動がひとりひとりの生き方に大きな意味をもち、その人をより輝かせるためには、自分の経験した喜びもまた悩みも積極的に話し、交流するまた他の人の経験に学ぶことである。またそういうことが伸びやかにできる力をもつことである。

座談会①

こんな夜更けもボランティア！？
濃厚な人間関係のなかの豊かさ
「他人あっての自分なんだ」

　札幌在住のフリーライター渡辺一史さんが 3 年の取材を経て書き上げた渾身の力作『こんな夜更けにバナナかよ』が講談社ノンフィクション賞を受賞した。全身の筋力が徐々に衰えていく進行性筋ジストロフィーという難病を患っていた鹿野靖明さんと 24 時間の介助・介護でその生活を支えたボランティア（愛称“鹿ボラ”）の壮絶な介護の現場を描いた長編ノンフィクションである。そこでは、ボランティアとは何かなどが重層的に深く追求されている。著者と当時の鹿ボラ、そして今は亡き鹿野さんの “盟友”我妻さんにボランティアとは何かを語り合ってもらった。

渡辺一史さん（ノンフィクション作家、作品に『こんな夜更けにバナナかよ』ほか）
横山樹里さん（当時、学生鹿ボラ）
片桐　真さん（当時、社会人鹿ボラ）
我妻　武さん（メビウスの会代表、DPI 北海道ブロック会議事務局長、障害当事者）

ボラのきっかけ「人が好きだった」

司会（編集部）　横山さんが学生のときにボランティアを始めたきっかけは？

横山　きっかけというよりは、やりたかった。その気持ちだけです。ボランティアなら何でもよかった。キャンパスで一番最初に見たのが鹿野さんのボランティア募集のチラシだったのです。それまでは中学時代から部活動の一環で、老人ホームでの楽器演奏などに参加していました。小さいころからおじいちゃんおばあちゃんが好きで、人が好きだった。大学に入ってすぐ鹿ボラを始め、丸 3 年やりました。

司会　最初の鹿野さんの印象は？

横山　緊張しました。いろんな機械をつけているので触ると壊れそうと感じました。

司会　鹿野さんはどんな人？

我妻　変なおやじ。

横山　やさしい人。

片桐　自分を隠さずに素っ裸で生きている迫力のある人。これほどやさしい人には出会えないというほどやさしい一面もあり、一方では冷たい一面もありました。同じ障害を持つ人たちの今後のために、自分の残りの人生を過ごしていきたいという素晴らしい一面もあったが、だらしなかったり、ずるかったりする面もあった。それをすべてさらして生きていた人。24 時間周りに人がいるから隠しようもなかったのかもしれませんが、すべてを全開にしていました。そういう人間の付き合いはなかなかないです。うわべの付き合いではなく、自分の弱いところ、ダメなところをさらして付き合うところが魅力でした。

司会　鹿野さんが亡くなって 1 年半ですが、今振り返ってどうですか

横山　もう一度やりたいです。鹿野さんに会いたい。でも今は就職したので時間もありませんが。

最近のボラはフラットな関係が特徴

司会　『夜バナ』（本の略称）に出てくるボランティアは 20 人以上ですが、ボランティアする理由はそれぞれ違いますね。

渡辺　今回ボランティアの取材をして、ボランティアにはタイプがあることがわかってきました。障害者運動を支えた 80 年代のボランティアは社会変革型のボランティア。80 年代がもう少し進むと自分は何者かを考える自分探し型ボランティアが増えました。さらに進んで 90 年代はボランティアがとても盛んになり、サークル活動的なボランティアも増え、敷居が低くなった。大きく分けるとこの 3 つ。最近のボランティアは「～してあげる」という考え方をもっていないところが、いいと思います。

我妻　ボランティアの底流には、自分探しの人がずっといると思います。ボランティアで自分のやりたいことを見つけられるなら、それは良いが、中には間違ってしまう人がいます。鹿野さんとは、それを「ボランティア病」と呼んでいました。最初は後押ししていたのが、途中から自分が先に走ってしまう人です。

渡辺　自分探しならいいが、なかにはボランティアに依存しているんじゃないかと思える「ボランティア依存症」のような人もいます。人を支えることで自分の存在意義を持つ

人。そういう人は障害者に癒しを求めがちで、障害者を助けることにいろんな幻想をもっているのです。それが見えたとき、本を書くのが難しかった。
　障害者の役に立ちたい気持ちが強すぎて、自分の生活がボランティアに振り回される人もいました。ボランティアをうまく生活に取り入れて、生活を豊かにする「ツール」として使えばいいんだということがわかるまで、人それぞれに時間がかかりますね。

生活を豊かにするツールとしてのボランティア

司会　生活を豊かにするツールとしてのボランティアとは？

片桐　渡辺さんの取材を受けた際、ボランティアは傍目からは温かい話だと思われる事が多いので、自分はクールにしたいと思って答えました。東京での学生時代、ボランティアを通していろんな人間関係が広がった経験があったので、人との出会いを広げる為にボランティアをやっていると、取材時に答えたのです。でも出来上がった本を読むと、ボランティアが傷ついたり泣いたり笑ったりしていて、その人たちの方がいいなと思いました。
　人間が心穏やかに生きていくためには、何人か又は何箇所かから必要にされたり、承認されることが大切だと思います。ボランティアをすると自分が必要とされていることが確認できるので、心穏やかになれるのです。他に自分の居場所がない人はなおさら。だから自分の体力をかえりみず、のめりこんでしまう人がいるのではないでしょうか。鹿野さんの所では自分が必要とされていたと思います。

行っているうちに自分が出てきた

横山　私は、鹿野さんの所では必ずしも受け入れられていたわけじゃないと思います。鹿野さんは厳しかった。ボランティアを辞めさせたりもしました。鹿野さんに受け入れられている、という感覚はなかったです。私がボランティアに行っていたのは、自分探しという訳ではなく、むしろ行っているうちに自分が出てきたのです。

片桐　私も社会変革型ボランティアとはいっても、鹿野さんのところでいろいろな自分が出てきました。だめな部分も見え、結果として自分探しの一面もあったかもしれません。

渡辺　自分探しを目的としなくても、結果としてボランティアをやっていて自分が出てきた人は多いはずです。自分もそうでした。鹿野さんを取材する事にのめりこんでいって、本を完成させたら、すごく自分が出ていました。

ボランティアは、手話では「ともに歩む人」

司会　ボランティアに対する社会の認識も変わっていますよね。

片桐　学生時代、重度の脳性まひの人の介護ボランティアをやってました。バブル時代で大学のレジャー化が定着した時代。自分はそれに馴染めずにいた頃、ボランティアの情報がありました。当時はボランティアを「障害者の介助」と言っていました。「ボランティア」という言葉は使っていなかった。介助をしている事を人に知られることは恥ずかしいと感じられて、周りに言えなかった。だから社会のすみっこにいるように感じました。

横山　今はむしろ「障害者の介助をしてます」という固い言葉を使うほうが恥ずかしい。今なら「私はボランティアしてます」と気楽に言えます。

渡辺　ボランティアという言葉が肯定的になり、広く社会に認知されたのですね。

我妻　確かにバブル前後でボランティアを表す手話も変わりました。前は「ハートを提供する」「ご苦労さん」という手話がボランティアを表したが、今は「ともに歩む人」の動作でボランティアを表します。

濃密な人間関係の中にあった豊かさ

司会　人とつながりたいとういうのはボランティアをはじめる大きな要因ですね。

渡辺　はっきりとそう認識して始める人は少ないかもしれないが、何か満たされない、心寂しいと感じて、実際にボランティアをやっているうちに、自分がボランティアをはじめた理由は、人とつながる事だったんだと気づくのではないでしょうか。鹿ボラしてみて魅力だったのは、濃密な人間関係のわずらわしさがある反面、とっても豊かな部分があったことです。

　人と人が濃密にかかわることは、とてもわずらわしい。健常者同士でもそう。それを簡単に避けることもできます。でも鹿野さんはよそよそしくしていられない、人間関係をつめていかないと生きていけない。

　その結果、人の嫌な部分やわがままな面を見ざるを得ない。でも濃密な人間関係の中に豊かさや温かい部分があった。他人あっての自分なんだな、ということが最終的に見えてきた。鹿野さんのボランティアをやって見えてきたものはとてもシンプル。他人あっての自分であるということを、頭ではなく体で改めて認識した。鹿野さんはそれを何十年も実践してきたすごい人なのだと。

我妻　ボランティアを受ける側も渡辺さん同様、自分探しなのかもしれません。だからしんどくても外に出ていくのかもしれない。今でも施設のなかで暮らし、多くの人とかかわらない人はたくさんいます。鹿野さんもそうでした。人とのかかわりは好きではなかったが、さまざまな事情で、しんどくても外に出て、たくさんのボランティアとかかわりながら暮らす道を選んだのです。

人間を巻き込むきっかけが「障害」

渡辺　重度の身体障害者というのは、他人と付き合うことを義務付けられた人なんじゃないかと思います。鹿野さんも人付き合いは好きじゃなかったが、当時は地域で暮らすためにはボランティアに頼らざるを得ず、いやがおうにも巻き込まれたわけです。でもそのことで、たくさんのプラスが得られた。ボランティアの方もどんどん鹿野さんに巻き込まれた。その結果として、とても豊かなものを得たのではないでしょうか。

我妻　現実は厳しい面があります。障害者本人にカリスマ性があったり、オーラを発する人たちじゃないとじっさいにはボランティアが集まりません。でもそういう人たちがいることで、そういうボランティアがあるという事を多くの人に気づかせることができます。

渡辺　鹿野さんはオーラのあるスーパー障害者の一人でした。でも最初からそんなタフな人じゃなかった。もっと気の弱い内気な人でした。でも自立生活をすることで、あんなに強くなっていったんだという事を、本で伝えたかった。最初から鹿野さんは強かった訳じゃなく、ごく普通の人だったことを描きたかったのです。
　今は施設にいる障害者の人にも「俺なんて無理」とは思ってほしくない。また健常者はボランティアには強い善意がないとダメだと思っているかもしれないが、そうじゃないんだということを本を通してわかってほしかった。

我妻　地域で暮らす障害者はそれほど増えていません。ボランティアの研修で『夜バナ』の内容を伝えるとき、こんなボランティアもいるんだという事を伝えたくて使っています。いろんなボランティアがいることをわかってほしい。

ボランティアの可能性

司会　最後にボランティアの可能性について。

横山　私は自分のあいている時間のすべてをボランティアに使いたいとは思いません。自分の時間もボランティアの時間もあるといいなと思います。

渡辺　可能性はたくさんあると思います。鹿野さんを通して感じたのは人間関係。もし社会制度が充実してボランティアが必要なくなったら、逆にさみしいと感じる。ボランティアがまったくいなかったとしたら、鹿野さんは鹿野さんでありえたのか。人間関係を築く大きなひとつのきっかけとしてボランティアには大きな可能性があります。いやおうなく巻き込まれていくということが大事です。

我妻　お金や物じゃない新しい価値観をつくる人たちがボランティア。人が困っているのを見過ごすことができず動いている人が大勢います。阪神大震災であれだけのボランティアが動いたから NPO 法ができたんだと思います。そういう人たちがどんどん出てくれば、必ず新しい価値観が生まれます。
　ある哲学者は「21 世紀は精神性の時代だ」と言っていましたが、その精神性の時代を作っていくのはボランティアなんではないかと思います。

片桐　ボランティアはお金や者じゃない、人と人のつながりを経験した、いい場だが、障害者側から考えるとそれは大変な負担。今はまだきちんと確立されていない制度を作っていくのがボランティアだと思います。自分のことを言うと、障害者の介助をしたことで、初めて濃密な人間関係を経験しました。でもそのときは本当は人が嫌いだった。ボランティア経験を通じてようやく人が好きだと言えるようになった。

司会　どうもありがとうございました。

それぞれのボランティア

毎日がボランティア精神。自分が活かされる喜びを

市立札幌病院ボランティアの会「やさしさ・ジェントル」　島尻　晃さん

　市立札幌病院の入口を入ると、通院患者さんに交じってベレー帽のボランティアスタッフが車いすの患者さんをサポートしたり、院内の案内をしている。これは同病院のボランティアの会“やさしさジェントル”のメンバーたち。
　1995 年の新築移転を機に地域に根ざし、市民に開かれ愛される病院づくりを目指して病院のボランティア制度がスタートした。以来、案内のほか、入院病棟ふれあい活動（話し相手・新聞などの代読・紙芝居の読み語り・図書整理）や病院の花や庭の手入れ、コンサートや季節の行事の運営など、10 代から 80 代まで 120 名以上のメンバーが病院内で活躍している。
　今回は今年 5 年目という島尻晃さん（83 歳）にお話をうかがった。

退職後の余暇を活かして

　島尻さんのボランティアの始まりは、難病である北海道スモン患者の会の事務所の会計サポートに始まる。退職後の余った時間に自分を活かして何かボランティアをしたかったからだ。
　その後、そこで知り合った仲間の紹介で以後 7〜8 年に渡り、北海道開拓の村の解説ボランティアとなる。単に建物の説明だけでなく、説明背景にある北海道のなりたちから開拓使の歴史など自発的に学びながらの活動だった。
　1995 年に体験ボランティアを通して“やさしさジェントル”に登録。登録の際には、ボランティア研修も受け、自己研鑽のための学習会や講演会にも参加した。現在は主に案内ボランティアを行っている。

健康でボランティアできる環境があることを喜んで

　長くボランティア活動を続けておられる島尻さんのボランティアへの思いは、どんなだろうか。
　「私が信心する宗教の生活信条の中に“御仏の恵みをよろこんで互いに敬い助け合い、社会のために尽くします”というのがあります。その精神もありますが、親にもらった健康な体を遊ばせておくのはもったいない。なにかやるなら少しでも社会の役にたちたい。今、

ボランティアは、私の生活の支えです。人のためというより、むしろ自分のため…。さあ、ボランティア行ってくるぞとがんばれるんです」

ボランティアできることは身近にたくさんあるはず

　やさしさジェントルでの活動以後、まちなかでも車いすの人が目にとまるようになったという島尻さん。元来のおせっかい精神のせいと笑うが、地域でも住居である市営住宅内のごみ拾いや障がい者や高齢者の車の雪かき（当番制になっていない）など自発的に行っている。
　「外注で頼むとか、謝礼をだすとか言われてもそれじゃあできないですよ。肩に荷を背負うことになる。今の自分でできる範囲でやっていきたいですね」
（取材文　斎藤克恵）

★ボランティアを募集しています！
小学生から大学、高齢の方までできることで取り組んでください。あなたの笑顔待っています。
市立札幌病院ボランティアの会
「やさしさ・ジェントル」
札幌市中央区北 1 条西 13 丁目
TEL　011・726・2211
（内線 2281・向井まで）

自分のやりたいことが「そこ」にあったから…

NPO 法人　ボランティアサークル手と手　東　智樹さん

　札幌の冬の大イベント雪まつり。「外出をあきらめている障がいを持つ人や高齢者の人にも楽しんでもらえたら…」ボランティアサークル「手と手」のメンバーがそんな気持ちでスタートした車いす介助ボランティア。以来毎年 200 名以上のボランティアが車いす介助の研修を受けて、雪まつり会場に設置した「福祉ボランティアハウス」に参加している。利用する人は 400 名を越え、市内はもとより道外からの旅行者も年々増えているという。
　現在は雪まつりのほか、ふれあいキャンプ・旅行・車いす介助指導など幅広い活動を展開させている。長く「手と手」のボランティアスタッフとして活躍している東智樹さんにお話をうかがった。

　誰もが平等に外出できる環境づくりを

　私は 7 年程前からさっぽろ雪まつりで「福祉ボランティアハウス」を運営しているボランティアサークル手と手という団体でボランティアをしています。今まで自分がボランティアをしているという意識はなく、ボランティアについてあまり考えた事がなかったのですが、自分が所属している団体が「ボランティア団体」である事から今回改めてボランティアについて考えてみました。
　私は、ボランティアをしたいという想いから入会したのではなく、自分のしたい事がそこにあった。そして自分と同じ思いの人たちがそこにいたから入会したのだと思います。

自分ができることをきちんと認識してボランティア参加を

　では自分のしたい事は何か、それを改めて考えてみると…私自身が車いすを使用していることもあるのですが、誰もがみんな外に出かけられるような環境を作っていきたい。それはハード面だけではなく、個々の人達に理解してもらいたい、という事です。自分のしたい事が他の人の役に立つ事はうれしい事です。こういった事から考えると、ボランティアとはまずは自分のやりたい事、そしてそれが何らかの形で誰かの役に立つ事ではないかと考えます。
　ただ、無理をして続けられないのではあまり意味がありません。長く続けるために、自分が出来る事をきちんと認識しなければなりませんし、自分が出来る事を知る良い場所でもあると考えます。

一緒に活動しませんか？

NPO 法人　ボランティアサークル
「手と手」
札幌市豊平区豊平 7 条 8 丁目 4-15
TEL　011・818・0801
FAX　011・818・0803
http://www9.ocn.ne.jp
E-mail　tetote@gamma.ocn.ne.jp

楽しいことからはじめよう！

「エゾロックがあるからガンバれる」　ezorock スタッフ　高橋　美衣さん

　北海道の若者のビッグな祭典、野外イベントに石狩湾新港で開催される「ライジングサン・ロックフェスティバル」がある。出演するアーチストの数は、60 組以上、そこに全国から 6 万人もの若者たちが集結する。
　その広い会場で来場者に資源としての「ごみ」を分別する意識をもってもらうために「ごみゼロナビゲーション」をプロデュースし実行するのが、国際青年環境 NGO、A SEED　JAPAN&その北海道メンバー「エゾロック」。その数 200 名以上というボランティアたちだ。2000 年にボランティアとして参加し感動し、現在「エゾロック」のコアスタッフとして活躍する高橋美衣さんにお話をうかがった。

動機は「イベント見たい！」

　私は今、23 歳で会社員として仕事をしていますが、ライジングサンのボランティアには、大学生の頃から関わっています。動機は大規模な野外音楽イベントを見たい！という単純な気持ちで応募しました。
　「ボランティア」そのものに興味があったわけじゃないんです。学部では環境問題について学んでおり、それについてなにか活動はしたいと漠然と思っていました。ボランティアの募集でしたので、奉仕的な活動のイメージを描いていましたが、実際は、「こんなに楽しんでできるなんて」というほど、活動自体にやりがいがあって楽しいものでした。

何かの役にたてるのがうれしい

　ごみの分別をしていると、お客さんが「がんばってね」と声をかけてくれる。言われるととってもうれしい。アルバイトで行っていた接客業でも、「ありがとう」と言われることはありますが、それは仕事でお金のためにやっていること。ボランティアでは、単純に何かの役にたてることがうれしいのです。
　ライジングサンには私は一人で参加しましたが、活動は 10 人グループで動きますからすぐ友達もできました。普段、学校の教室やサークルの仲間とのふれあいくらいですが、ここではいろんな考えの人に会えますし、何より一緒になにかを創り上げて行く喜びとやりがいに充ちています。そんな気持ちにあふれています。
　エゾロックの活動は、さまざまな楽しい企画に関わっていくうちに気がついたら環境への意識が変わっていた…そんなきっかけづくりを進めています。

　ボランティアから始めて現在はコアスタッフとして活動しています。今の私は、「エゾロックがあるから、元気にがんばれる！」今年も北海道を盛り上げていくぞ！
（取材文　斎藤克恵）

一緒に活動したい方も大募集！
ezorock 事務所
札幌市中央区北 5 条西 6 丁目札幌ビル 8F
http://www.gomizero.org/ezorock/
E-mail　ezo_rock@hotmail.com

『自分なりの素敵な老い方』をみつけたい

手稲ふれあいボランティア　石墨信子さん　インタビュー

　石墨信子さんは、26 年間、仕事中心の多忙な毎日を送ってきた。平成 5 年に退職。今は手稲区を中心に「手稲ふれあいボランティア」（会員制）として地域に根ざした活動を続けている。高齢者や障がい者の個別援助（掃除、炊事、通院介助、外出介助）を中心に、集団行事参加、環境美化（街路花壇の整備他）など活動内容は様々。支給されるのは、交通費と実費のみ。石墨さんは、退職後に介護ヘルパー2 級の資格もとった。それでも仕事でなくボランティアをする。そのココロはいかに？

ボランティアのきっかけは？

　退職時に PTA 役員会で私がもらした『専業主婦宣言』。すると他のお母さんに『じゃ、ボランティアの勉強でもしたら？』と手稲区社会福祉協議会主催の無料のボランティア研修コースを紹介されて受講しました。趣味に生きるにはお金がいる。ボランティアは時間があればできるはずと。その上級コースを終了して、手応えを感じたのです。
　自分の両親は高齢で、もとの職場の同僚達の中にも病気で入院経験を持つ人が多くなってきた。今後の自分もただ老いていくだけの人生なのか！？『老いること』について真剣に学ばなければ、という強い思いが湧いてきたその時に、手稲ふれあいボランティアに誘われたのです。

他人の家に行くことに抵抗はない？

　なにより、とんでもないことに気がついた。私は、専業主婦をしたことがない。よその家の家事ができるのか！不安でした。はじめは失敗の連続。依頼者さんの家にいく時は仲間とペアを組み協力して仕事をするのですが、やってはいけない所の掃除をしてしまい、依頼者さんに平謝りしたことも。ボランティアとはいえ、人を相手にする仕事は責任があります。やるべきことはちゃんとできるようにならなければ。苦手な料理も仲間に教わり、家事もとても勉強になりました。他にも必要な講習を受けることもある。学ぶことは多いです。

介護ヘルパー2 級資格をもちながら、無償のボランティアをするとは？

　報酬を得る仕事がしたいなら、他の仕事を選びます。自分が楽しいから自分のためにやっているのです。ボランティアだからこそ、介護保険や時間に縛られない応用のきく仕事

ができます。同じ方と長くつきあい、信頼関係がうまれる。ヘルパーさんとも共存、協力関係があります。責任もあるけれど、喜びが大きいです。

最後に石墨さんにとって、ボランティアとは？

　生活の一部ですね。多くの高齢者と出会うことで、自分のなりたいお年寄り像を思い描くことができる。ボランティアを通し、老いてゆくことの心の準備ができるのは、素晴らしいことと思うのです。
（取材文　長谷川宏美）

「車いす」が教えてくれた生きる道

NPO 法人「飛んでけ！車いす」の会　石川　聡美さん

　人は誰でもほんの少しの偶然や一瞬のタイミングで、その後の人生を大きく変えうる可能性を秘めていると言えよう。自分の人生をどう生きるのかということを常に模索している人も少なくない。その人生を大きく変えうるものが何であるのか。また、それがいつ訪れるのかは誰も知るところではない。

　石川聡美さん、29 歳。CG デザイナー。彼女はごく最近ある一冊の本と出会う。それは、とあるハンディを抱える人について書かれた本であった。それが彼女自身の人生を見つめなおす最初の契機となる。「私にできることってなんだろう」。そんなことを考えながら生き方を模索し始めていたある日のこと、知人に紹介されて「飛んでけ！車いす」の会の存在を知る。この出会いが彼女の人生に大きな変革をもたらす第 2 の契機となった。
　「飛んでけ！車いす」の会。それは、日本で不用となった車いすをきれいに修理して、途上国に旅行者の手荷物として直接手渡す NPO 法人だ。車いすと一緒に現地へ飛ぶ人を募集していると聞いて、これなら自分にもできるかも知れないと思った彼女の胸の内は、もともと大好きなベトナムに運びたい、そんな気持ちが日増しに大きくなっていった。やがて彼女はやっぱり行こうと決心をし、自分探しの旅に出る。
　ベトナムに飛ぶ前に、自ら運ぶ車いすのことをもっと知りたい心境になった彼女は、メンテナンスに参加した。補修作業とさび取り。難しいことはわからないけれど、きれいにしたいという思いで懸命に磨いた。1 台、2 台、3 台とひたすら磨き続けるうちに、彼女は意識の中で、それまでと違う何かが芽生えるのを感じていた。車いす。それは特別なものではなくて、もっと身近な存在のような。彼女はこのメンテナンスへの参加を通して、少しだけ車いすのことがわかったような気がしたのだった。単に運ぶということではなくて、何か大切なものを得たような感覚だったという。
　こんなエピソードもあった。出発も近いある日のこと、旅行代理店から 1 本の電話が入った。成田までの航空機の機体が小さいために車いすを積めない可能性もあるというのだ。目的が達せられないのであれば行く意味がない。そう思った彼女は安全策をとり、運送便で事前に成田まで送ることにした。基本的に経費はすべて本人の持ち出しとなる。しかしその時の彼女には達成すること、その一心だった。車いすを使用する人たちは、色々な場面で不便を感じているに違いない、この時、彼女はそう感じていた。社会の仕組みがもっと問われてしかるべきとそう思った。
　03 年 8 月末、成田を発って 6 時間。そこはベトナム、ホーチミン。ホテルからタクシーに車いすを積みこむ。なかなか積みこめずにいると、近くに居た人たちがみんな手伝って

くれた。彼女はとても感激し、好きなベトナムが益々好きになった。ベトナムの人たちの優しさに触れた瞬間だった。

目的地の小児病院。最初は表情の硬かった子どもたちも、デジカメで写真撮影していると次第にたくさん集まってきたという。車いすと一緒に持参した手作りの千羽鶴。すぐに部屋に飾ってくれてとても感激した彼女は、「また運びたい」そう思った。何かそれまでとは違う自分を感じずにはいられなかった。

29 年の人生で、新しいことに取り組むことに、ある意味彼女は臆病になっていたのかも知れないと振り返る。しかし今は違う。「やりたいと思ったことは幾つになってもチャレンジしていきたい」とそう思えるようになったという。端から見ても決して小さくはないその一歩も彼女にとってはとてもとても大きな一歩だったに違いない。

こうして彼女はこの春、とある団体の派遣員として現地に障害者施設建立のための一助となるべくベトナムへ赴く。1 年か 2 年かあるいは 3 年か、彼女はまた自己実現の、そして新たな自分探しの旅に出る。そんな彼女のきらめく姿が眩しくもあり、元気をもらう取材となった。一人の人生を左右することもあるこの活動、君は何を思うか。

（取材文　ユメオ）

NPO 法人
「飛んでけ！車いす」の会事務局
札幌市中央区北 5 条西 6 丁目札通ビル 2 F
TEL／FAX　011・242・8171
E-mail tondeke@anet.ne.jp
http://www6.plala.or.jp/tondeke/

# ○○ボランティア！？

NPO 法人北海道 NPO サポートセンター職員
松本　公洋

「無償」、「有償」、「強制」、「必須」、私がこの業界に来てから聞いたボランティアの種類である「無償」以外のボランティアの名称は、極論から言えば、有償ボランティアは支払い能力がないための言い訳であり、強制ボランティアは奴隷であり、必須ボランティアは脅迫と大して変わらないように思う。もちろん、お金で割り切った方が気兼ねしなくていい場合もたくさんあれば、最低賃金以下の対価しか払えない場合は、有償ボランティアもやむを得ないのかなぁとも思う。

私が思うボランティアとは、手を貸して欲しいと思っている人に対して、自発的に自分のできることで協力することであり、嫌々やらされるものではないが、交通費程度の実費はいただいてもかまわないものと思っている。

座談会では、団体のスタッフを同じ賃金であっても「有償ボランティア」と「職員」に呼びわけているという話が出た。どうやら金のために割り切って働く者を「職員」というらしいが、私は紛れもなく北海道 NPO サポートセンターの「職員」である。勤務態度やどれだけ団体に貢献しているかは、遠慮なく同僚に聞いていただいても働きぶりを見に来ていただいてもかまわない。

私が目指すものは、「自律プロ」と呼ばれる自ら考えて行動する職員である。団体の運営を考えたり、人一倍思いやりがある人を NPO で働いているからと言って、わざわざ有償ボランティアと言うこと自体おかしくないだろうか？そんなの社会人において当たり前のことなのだから…。

ちなみに、世の中には営利企業の中においても助け合いの精神を持ち、社会の役に立ちたいと思いながら働いている人も多いが、この人たちは一体どうなるのかを尋ねたところ、そういうことを言うのは「屁理屈」だと言われ興ざめした。これでは「バカの壁」である。

だいたいにして、なぜ、わざわざ○○ボランティアといわなければならないのか？私は無駄な言葉遊びをしているように思えてならない。この機会にボランティアという言葉の重みを今一度考えてみたい。

「森林づくり」の活動に参加して

NGO「緑の地球ネットワーク」ボランティア　◎棟方　鋼男

　私は森林づくりが好きで、道内で植林や間伐などを行っている団体 2 つと中国・北京市の水源地帯の大同市（黄土高原の東端）で森林造成を行っている NGO「緑の地球ネットワーク（GEN)」（本部大阪市）の会員になっています。

　動機は「地球温暖化防止のため」などという肩に力の入ったものではなく、森林を失った土地に森林を再生することが好きだという単純なことからです。

　北海道は、森林づくりに必要な降雨・降雪に恵まれ、自然条件、社会条件面とも問題はありませんが、大同市の森林は寡雨（年降水量 400mm）の悪条件の中で、1500 年以上も前から痛めつけられ、農民が非常に貧しいために、畑地の拡大、薪の採取、山羊の放牧などで森林の再生を阻み、本来森林であるべき土地が耕して天に至るの言葉そのままに、地力の痩せた畑地になり山腹上部にまで広がっています。早春は茶色一色の世界で、北京市の水源地帯とはとても思えない状況を目にすると、誰でも森林の復活を願う気持ちになると思います。

　札幌周辺での森林づくりは、一つのグループは堤防や採石跡地などへの植樹、もう一つのグループは過密な森林の間伐・除伐などを主として行っています。

　札幌周辺での森林づくりに関して感じることは、市民の植樹への関心は高いのですが、植樹への一般参加者の多くはイベントへの参加の域に止まっているということです。森林づくりは子育てと同じで長期間を必要とし、植栽後に下草刈りなどの保育管理が必要ですが、それに対する関心は低いのが現状です。ボランティアとして保育管理に汗を流してこそ喜びが膨らむと思いますが…。

　私自身は再生される森林を思い描きながら、苗木づくり、植林、下草刈り、間伐などを、この活動で知り合った仲間と一緒にやることに幸せを感じています。

　中国大同市での GEN の活動は、日本で集めた資金を使っての地元農民による森林造成や技術の移転を行うと同時に、植林後の育成管理のためには農民の所得の向上が不可欠との観点から、植林の他に農民の現金収入のために果樹園造成の支援も行っています。1992 年から 11 年間で植林面積 4200ha、1400 万本の植栽を行っており、日中戦争の激戦地だったために当初反感の強かった地元にも支持され、岩手県と同じ大きさの大同市の面積から見ればまだ微々たるものですが、確実に成果が上がっていると思います。

　日本から中国の森林づくりのために小渕基金などの資金の支援がされていますが、その支援は植栽が主体になっています。確実な森林づくりのためには、植栽後の保育育成管理の面も加えた支援方法の見直しが必要だと感じています。

　GEN のワーキングツアーに参加して、地元の人たちと一緒に植林し、農家にも宿泊して感じることは、①水不足が森林造成のみならず生活の全てを規制しており（非常に貧し

い)、資源としての水の価値、貴重さを再認識するとともに水資源に恵まれた日本の幸せを実感することと、②ここには日本が経済発展と引きかえに失ってしまった子供達の好奇心と目の輝きがあるということです。

私個人としてはほとんどたいした役割も果たしていませんが、会員として森林再生の活動につながっているという自己満足を得ています。

なぜ中国まで行くのか、道楽ではないかと言われることもありますが、場所は国内でも中国でもよく、年齢、性別、経歴も異なる人達が、超長期間を必要とする「森林の再生」ということを夢見て、一緒に関わり、汗を流し、植えた苗木の成長を見て喜ぶ、このことが参加への報酬であると感じています。

座談会②

あなたにとってボランティアとはどんなものですか？

「私にとってのボランティア」

　みなさんはボランティアをどうとらえているでしょうか？どんな思いでそれぞれの活動の現場で関わっていますか。自分自身にとってのボランティアはどんな意味を持つか…読者のみなさんも一緒に考えてみてください。

加納尚明　（NPO 法人　札幌チャレンジド）
酒井泰山　（NPO 法人　ドットジェイピー）
棟方鋼男　（緑の地球ネットワーク）
浅野目祥子　（NPO 法人　ボランティアサークル「手と手」）
鮎瀬賢一　（NPO 法人　「飛んでけ！車いす」の会）
松本公洋　（NPO 法人　北海道 NPO サポートセンター）
乃祢　靖　（札幌国際大学学生）
長谷川宏美・斎藤克恵　（編集工房 NODE）

ボランティアってどんなもの？有償？無償？をどう思う？

酒井　私はボランティアという言葉を本当はあまり使いたくない。というのはボランティアというものは、やりたいときにやりたいだけやるというだけのことを意味していると考えているからです。“ちょボラ”という言葉もあるくらいですし。ボランティアや市民活動といったものは、本来やりたいときにやりたいだけ、ただし責任を持ってというものであってほしいと思っています。私は、なぜ NPO に法人格が必要なのか？という質問に対して、責任があるからと答えます。ボランティアについても、参加しただけで本人は「やった！」という気持ちにはなりますが、責任も発生するということを分かってほしいと思います。

棟方　ボランティアの定義づけは難しいですね。ボランティアに関してお話を聞いていると、人との関わりということを挙げられる方がいらっしゃいますが、私は有償・無償に関係なく一定期間汗をかくことが１つのポイントであると思います。汗をかけないのであればふところに汗をかいてもらうこともできます。森林づくりはボランティアでと官庁はよく言うのですが、実態はただのイベント参加です。ただその日だけの参加ということですね。しかし、森林作りというのは草を刈ったり、つるを切ったり、森を大きくするまでに

相当の労力がかかる。それなのに、後は好きな人だけがやっているというふうになってしまう。そういう部分にボランティアの難しさを感じます。

浅野目　私は「ボランティアをしている」と言ったことはなくて、ボランティアの定義づけもすべきだとは思っていません。ただ私が代表理事をしている NPO 法人では、団体名にボランティアサークルとつけています。それはなぜかというと、ボランティアとして事業をしたいからです。そうでなければ法人はいらないと考えています。そして、その団体の活動について、あえて私は緑を植えるボランティアとは違うとはっきり言っています。なぜなら相手がいるからです。相手があることなのでやりたいときだけやりたいだけではだめなのです。それでも通常はボランティアというのは、やりたいことをやるということだと思います。例えば雪まつりでは、大学で 1 単位あげるから強制ボランティアをしなさいということがあります。このようにやりたくなくてもボランティアをするというふうになると、それは本来目的と違うと思います。常にやりながら考えてもらいたいところです。

松本　あるイベントで便宜上集めた人たちを、強制ボランティアや必須ボランティアという名目で、断れない状況にしてしまったようなことがあって、普段お給料を払っているのに突然、土日にボランティアをしてもらいました。やりたくないのにしぶしぶやるのは、ボランティアをする方もされる方も可哀想ですよね。ボランティアは得意分野で関わって、有償ボランティアというのは交通費とかお弁当くらいでいい。お金がないからという理由だけでボランティアをあてにするというのは変だと思います。

社会に対する価値を持っていれば、ボランティア

刀祢　まだ私はボランティアというのに直接関わったことはないのですが、ボランティアとは“無”だなと思います。ボランティアしているときは、何も考えずに、心と心が通い合えるようなものがボランティアだと考えています。

鮎瀬　私はボランティアという感覚はなくて、活動でいろんな経験をしているし、事務所でもいろいろ仕事を教えてもらっているので、刀祢さんが言っているように、心の交流や、与えたり与えられたり、というのがいいなぁと思っているので、あまりボランティアということは意識しないですね。

加納　私もボランティアは定義できないと思います。一人ひとり考えるしかない。強いて言えば、社会と関わりを持つことがボランティアには欠かせないと思います。社会とは人でも自然でもですね。一つ極端な事を言うと NPO の職員と面接をしたとする。1 人はミッ

ションを理解してどうしても職員になりたい。もう 1 人はお金が必要で職員になりたい。2 人とも採用したら、それで NPO はボランティアというふうにいえるでしょうか？ということではないでしょうか。やはり心の持ちようなのかなと思います。私は年収 1 千万円もらっていてもいいと思うのです。それ以上に社会に対する価値をもってやっていればボランティアだと言えると思います。

松本　以前、ある団体でボランティアを募集しようとしたら、そこの代表からボランティアはあてにならないと言われたことがあります。

浅野目　雪まつりに関して、全員無償でボランティアをしています。だいたい 150 人います。私も手弁当で参加しています。無償でも、あてにならないことはなくて頼りになります。お金じゃなくても経験とか人のつながりだったり。そんな中で楽しく関わってもらえればまた参加したいと思ってくれると思います。だから毎年来てくれるリピーターが多いのだと思います。1 週間も有休休暇をとってきてくれる人もいます。

加納　となりのおばあちゃんの雪かきをしてあげるというようなボランティアではなく、組織としてボランティアを語るときに、まずは組織の中の信頼関係が重要ですよね。信頼関係がなければ、ボランティアが全部裏目に出てしまうことがある。ボランティアというのは、組織をどう運営するかとか、どういう組織をつくるかということに非常に深く関わっている。

ボランティアをしていて矛盾や疑問を感じたことはありますか？

浅野目　この間、久々にすごくボランティアをしたと思ったことがあったのですが、ごみステーションがとっても汚くて、その掃除をしたときに“ボランティアした！”って思いました。「手と手」ではボランティアをしていると思っていなかったのですが、そこを考えたときに、やりたくないことをやったからボランティアをしたな、と思いました。社会を住みよい環境にするために、やりたくないけれどやったからボランティアと思った。社会のために貢献するというのがボランティアなのかなと思いました。

加納　言葉にすると重いけれど、もっと気軽にできたらいいと思いますよね。

棟方　私が所属している団体では、関わっている人が皆、森づくりが好きでやっている。楽しんでいます。みなさんは木ではなく人間に関わっている。不本意なこともあるかもしれないけれど、それでも続くのはやはり好きだからではないでしょうか。

斎藤　そういうことで組織内の価値観が共有されているのですね。以前大きなイベントでボランティアとして集まった人たちは望まなくてもそのポジションを担当しなければならない人も必ずいたと思うのですが、そういった状況であっても、そのイベントに参加できただけでよかったという感想を聞きましたが…。

松本　強制ボランティアというのは奴隷だと思います。ボランティアを神聖なものであるというように敷居を高くするつもりはないのですが、ボランティアというのは自発的なものなのではないのかと思います。

浅野目　例えば、さっきのごみ拾いというようなボランティアと、組織に関わって活動しているボランティアではちょっと違って、組織に属する場合には、やはり組織を維持管理運営していく上での責任も発生すると思います。

斎藤　ちょっとのボランティアでもその団体の名前で参加すると、外部の人間がみるとあそこの団体の人は…となってしまいますね。

酒井　私の関わっているところは、ボランティアをやるぞ！の意識で来ているというよりは、組織に入りに来る、自分を高めたいという人が多いです。学生だからというのもあるのですが。ただ、純粋にボランティアをしたいというなら、必ずしも組織に入らなくてもいいのではないでしょうか。

長谷川　ボランティアをするときに組織から入ればとっかかりやすいというのはありますね。

浅野目　人との関わりが目的だったら団体に所属する意味はあると思います。

棟方　個々人にとっては個人でも団体でもやることは同じだと思う。でも自分がやりたいことをするために、手段として団体に所属するというほうがやりやすい。一人ではやらせてもらえないこともグループだとやらせてもらえることもあるし…。ごみ拾いを一人でやってもいいけれど、みんなで河川敷でやることで多くの人の目にとまるとか、そのほうが効果的というのもあって、組織があるのではないだろうか。

鮎瀬　私がボランティアとして活動するのは、人と関わることと、勉強と、自分の成長のためというのがあります。個人的には、道路でごみがちらかっているのはいやなので、たまに拾ったりもします。これは奉仕のようなものだと思っています。ボランティアは、は

じめから苦労や損はするものだと思っているので、それによって自分を高めることができると考えています。

松本　基本的に、やりたいことをやればいいという意見は合っているのに、強制ボランティアはありなのですね。

浅野目　非難ごうごう浴びても、やらなくてはならないときにはやる。やりたくなくても社会のためにやらなきゃいけないことをやるのがボランティアなのかな。

長谷川　やりたくないことでも好きなことのためにやるべきときもあるし…。

松本　ボランティアと、ボランティア精神をもって仕事をするということがごっちゃになっているのかな。

刀祢　僕は学生で親から仕送りももらっているし、家賃の方が生活費より多くてお金はきつい。でもボランティアに自分のお金を使ってまで行きたいかと考えてみると、お金にこだわらず自分がボランティアをしていて、得をしたとか得るものがあるならいいと思います。単純にお金がほしいならバイトすればいいのだから。

浅野目　有償でも無償でも同じ責任はあるんだろうけど、有償の人は他の用事を蹴ってでもこなきゃならない。でも無償の人は来なければ来なくてもいいかな、というところ。福祉の場合は規制がいろいろあるので有償ボランティアという名前でやっている。

みなさんにとってボランティアとはどんなものですか？

加納　私がボランティアに関わったきっかけは「自分探し」です。個人生活としては一通りのことを経験して、なにかもっとないのかな、と思った時にたまたま市民活動団体に関わって、それが未体験ゾーンだった。いろいろな人がいて、なんかわいわい話していて。パチンコとか競馬とは違うし。そこで初めて社会と関わった。いろいろな関わり方があるということにも気付いた。だからいろいろな NPO に関わっているのですが、全部自分がやりたいことと合致しているから参加する。今は自分探しから、少し自分がみつかって、自己実現のステージに来ている。5 年、10 年後にはまた違っているかもしれないと思います。

松本　ボランティアは自発的に参加して役に立ってうれしいと思ってもらえれば、それで自分もうれしい…ということでしょうか？

刀祢　僕は、人と出会うことですね。

鮎瀬　僕は、人との交流と、自分の成長。

長谷川　私は他人のためにはやっていません。自分のためにやっていて、主婦としては得られない、仕事では得られない、階級も肩書きも関係ない、フラットな関係や、お金に代えられない喜びを得るために、いやなことも好きでやってしまうことでしょうか？

斎藤　私は、自分が納得できて好きなことだったら仕事とボランティアの境い目はありません。やらずにいられない。そこで自分が一番活かされ、喜ぶ人がいる、社会に還元されることが大切だと思います。

　その後もそれぞれの思いを発して座談会は続きました。座談会の最後に「手と手」の浅野目さんに、『ボランティア』の手話を教えていただきました。ボランティアという手話は、“一緒に歩く”両方の人差し指と中指を歩いているように前に進ませて動かします。（座談会扉・左の写真）

# ボランティアは人生のスパイスだ！

ボランティア活動アドバイザー　伊藤規久子

## ボランティア活動の原点は「楽しさ」と「共感」

「無償で（＝お金をもらわず）何らかのサービスを自発的に（＝命令や強制ではなく）提供する」ことがボランティア活動であるのなら、これまで、ずいぶんいろいろな活動をしてきたと思う。ホームステイやホームビジットの受け入れに始まり、異文化理解に関する講演会の企画。通訳や翻訳のボランティア。さまざまな会議やイベントの運営ボランティア。そしてボランティア活動全般に関する自主研究と学習会の企画。寄付もボランティア活動のひとつと考えるのであれば、自分が共感する活動や団体の会員や賛助会員になったり、わずかだけれど寄付をしたり。

でも、世のため人のためという意識はあまりなく、「楽しいので」「学ぶことがたくさんあるので」「誘われておもしろそうだったので」あるいは「協力したくて」「応援したくて」活動をしてきた。

## ボランティア活動の「報酬」

ボランティア活動は「与える」だけの一方的な行為？答えは NO！ボランティア活動は「ギブ・アンド・テイク」の双方向の活動だと私は思っている。これまでの活動を通し、私は、お金には換算できないさまざまなボランティア活動の「報酬」をもらってきた。

まずは、多くの人との出会い。ちょっとした出会いから自分の人生に大きな影響をもたらすような出会いまで、数々の出会いがあった。一度限り、短い時間でも、誰かと出合い楽しいひと時を共有することは毎日の生活に変化と潤いを与えてくれた。ボランティア活動をしながら、より充実した豊かな人生を送っている人や社会の問題に前向きに取り組んでいる人との出会いは自分にとって大きな励みとなった。

「学んだこと」もたくさんあった。自分とは異なるさまざまな人生を知り、「そういう人生もあるんだ」という発見や驚き。社会の多様性を肌で感じることができ、視野が広がった。自分とは異なる価値観や意見に出合い、ぶつかったり、戸惑ったり、悩んだり。机上ではなく実体験としての学習をすることができた。社会について知らないことを知り、気づいてなかったことに気づくようになった。

## ボランティアの対価はいつか自分に還ってくるもの

そして、一番うれしいのは活動に対して還ってくる「どうもありがとう」「とても楽しかった」「とても勉強になった」という感謝の言葉。「人の役に立った」という充足感は、人が生きていく上でとても大切なことだと思う。

ボランティア活動の対価は天下のまわりもの。回りまわって、いつか必ず自分のもとへ帰ってくる！もっともっと多くの人が自分の好きなこと、できることを活かしてボランティア活動に参加してくれるといいなと思う。そうすれば、その人の人生はより良いものになり、社会も少しずつ変わっていくはず。そのためには、ボランティア活動に参加しやすい仕掛けづくり、ボランティア・コーディネーターというポジションの確立、ボランティアを組織化するNPOの力量アップなどが必要だと思っている。

最近は、お金をもらい、仕事としてボランティア活動について話をする機会や講座を企画する機会も多くなってきた。でも、それとは別に、これからも私は自分の状況に合わせて、何らかの形でボランティア活動に参加していきたいと思っている。

ボランティア活動のない私の人生はスパイスの利いていない料理のようにたぶん物足りない、そう思っている。

ボランティアもいいけれど…

環境分野から見るボランティア活動の功罪

エコ・ネットワーク代表　小川　巌

ボランティア活動の範囲は想像以上に広く、深い。
私はこの数年来、環境ボランティアをエコ・ネットワークの
重点プロジェクトのひとつとして位置づけ、
様々なテーマの取り組みを続けてきた。
その中から得たボランティア活動の功罪の
一端を明らかにしたい。

●ボランティア活動の『功』

　まず功の部分から。環境の大切さは誰しも口にする。けれども余りに我々の生活に密着しているだけに、自分にとっての問題としてとらえ切れない人がほとんどだ。その糸口を実感してもらう意味で環境ボランティアの果たす役割は大きい。また対象がストレートに生身の人間でないだけに感情移入に迫られる心配はない。環境を対象にしたボランティア体験の持っている優位性が理解されよう。自然や環境を対象としたボランティア活動を経て人を対象にしたボランティアに移っていく方が、当人にも相手にもムリなく受け入れられるのではないか。

●または善意なる『罪』

　次は罪の部分を。罪というよりはマイナス面あるいは留意点とでも表現した方が適切かもしれない。洗い出していけば、マイナス面はいくつでもあげることが出来る。詳細は別の機会に譲るとして、ここでは既存の事業とのバッティングに絞って指摘しておくとしよう。つまり善意で始めた環境ボランティアが、業（なりわい）として行われてきた仕事とぶつかり合うケースが出てきたのである。
　例えば森林公園内の遊歩道の笹刈りを始めたところ、零細な地元業者の仕事を奪ってしまったなどはその典型である。福祉分野ではもっとシビアな形で表面化している問題なのではないか。社会あるいは地球の中で実践しようとしているテーマが、どんな位置づけにあるのか考えるだけの構想力がボランティア活動にも求められる、と私は思っている。